

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-15

感動している辰巳に、ごく自然に近づいた朝倉は無言でコーヒーカップをソーサーごと手渡した。

目礼した辰巳は、経験したことのない喉の渴きをコーヒーで潤した。

「私の手には負えないので、『H美術館』の絵画彫刻室長に引き継ぐことにします」と辰巳は真紀と朝倉に向かって明言した。

「そうされた方が、後々、問題が起こらなくてよろしいと思います」と朝倉は心得顔で肯いてみせた。

「『H美術館』は来年開館70周年になるのを機に公益財団法人に移行するので、記念セレモニー用のコレクション作品のハイライトとして購入したいのだが……。私の一存では決められないのでね」と朝倉はもどかしそうに言った。

「この作品を高く評価してくださったのですか？」と真紀は顔を紅潮させて訊いた。

「嬉しい誤算だね。ここへ来るまでは、どこかに物見遊山の気分があった」と辰巳はしゃがれ声で言った。

「できれば、室長さんと早めにお会いしたいですね」と朝倉は言って、空になった辰巳のコーヒーカップを受け取った。

「できる限り早めに上京させます。話は変わりますが、これまでの当館の収集活動の特徴は朝鮮半島や中国大陸のアンティークに偏っているので、1000点を超えるコレクションの中でも身近に感じられるような収蔵作品は少ないのが実状です。芸術的な妖艶さのある作品は『H美術館』の起爆剤になるから、何としても欲しい。だって、日本酒と色気ある日本画の相性は良いに決まっています。ところで、日本画界で横田画伯をランク付けするとどの辺りになるのでしょうか？」と辰巳は商人としての顔を覗かせて訊いた。

「近い将来、画風は違いますが欲目なしで平山郁夫（同年12月2日逝去）クラスになるでしょう」と朝倉は答えた。

「それは凄い！そうなる前に手を打っておきたいね」と辰巳は真紀を見て、ふっと肩で吐息をついてみせてから朝倉に向かって、「そうだ、『ホテルオークラ神戸』のロビーに平山画伯の巨大な日本画が飾られているのをご存知かな？」と同調するかのようには訊いた。

「白砂青松を描いた大作ですね。画題は忘れましたが、漢詩から引用されたと聞いています」と朝倉は画商のプライドを保ちながらクールに答えた。

「そこまでご存知とは……。神戸市民の一人として嬉しい限りです」

「知っていてよかったですよ」と朝倉は苦笑まじりに言った。